

候試験されるのハ勿論否たか夫をするのも中々世話で好ましか
らぬものに候今年ハ最初の三十日を貰受七月中旬に盛岡へ向て
出発可致覚悟に候」清吉の習居る業にハ成程少し資本か入用の
趣なれともさしたる事に無之日本人も一年丈ハ兎も角修業仕度
志願なれハ先は仄に致置候」先達ハ味噌御登セ被下毎度難有御
礼申上候

父君

武夫

138 明治15年6月14日 菊池長閑宛

(長閑注記) 第七号 明十五 六月十四日

第十号鉄道加入ニ付御申越の趣ニ従別紙差上候も御氣に入候ハ
、大矢に為御見御談被成度候私の名聞を御心配被下候様見得候
とも加入不加入ハ些も私の名聞に関する儀に無之候間決て御掛
念被下間敷候」おすみの櫛等御意に合ぬよし根子久平の噂を考
合すれハ物かよ過るとの儀なるへしと推察仕候姉ともへ遣たる
品より勝りてハ悪しとの御掛念ハ去る事ながら時か変れハ流行
も違ひ直段にも高下あり随て相応と思ふ度も□不儀なれハ強ち
板に興した様に同しからすと可宜且表向を云へハ今てハ私か支
度をする儀なれハ御両親の依估にも有間敷又私共も折角調たる
物なれハ於澄に遣度存候間私共に御あんじ被下て同人ニ御援被
下度候」私の学校仕事も殆と千秋楽に近く不日試験に取掛可申

(長閑注記)

「六月廿日達」